地域医療最前線

上田市武石診療所

患者さんと一緒に考え解決したい

診療所入口

上田市武石診療所長
廣瀬　聡 医師

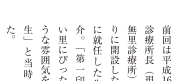
上田市街地から美ヶ原方面へ車で約30分。「武石口」の交差点を右折する。山をより近く感じながら進むと、程なくして目的地に到着した。武石地域は美ヶ原高原の東山麓に位置し、約9割を山林が占める。診療所周辺は田園も多く、緑豊かな風景が広がる。

診療所を取材したのは7月下旬。大気の状態が不安定な日が続き、かなり蒸し暑い。昨晩から降った雨はとまり、雲間から青空が見える。

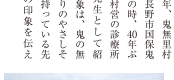
誕生した。人口は約16万人。今回取材した、上田市武石診療所。は、武石地域（旧武石村）にある。人口は3,600人程で、高齢化率は市の中で最も高い地域である。

診療所は昭和60年4月、武石村の武石診療所として開設された。武石地域の中心部にあり、健康センター、デイサービスセンターが隣接してこの地域の医療・介護・福祉の拠点となっている。

診療所長は、廣瀬聡先生。本誌シリーズに登場するのは2回目となる。前回は平成16年、鬼無里村診療所に現長野市国保鬼無里診療所の時、40年ぶりに開設された村営の診療所に就任した先生として紹介。「第一印象は、鬼の無い里にぴったりのやさしそうな容貌気を持っている先生」と当時の印象を伝えた。



デイサービスセンターと健康センターが隣設



診療所受付

やさしい先生

10時30分ごろ到着し、そのまま診療所に伺った。診療所内は患者さんが作った陶物などがあちこちに飾られ、待合室には大きな窓があり、温かのある明るい雰囲気だ。

待合室には患者さんと付き添いと思われる人で混みあっている。受付では、来院してきた患者さんと会計する患者さんの対応に切れ目がない。スタッフの皆さんはきぱきと動き、患者さんへは丁寧に接している。

スタッフに今日の状況を聞くと、「そんなに多くないです。25人くらい」と答えてくれた。「先生と患者さんとの関係については、「先生と患者さんいから、患者さんはいろい話ができるようだ」と教えてくれた。前回取材時の印象と変わらず、今も「やさしい先生」であることが分かった。

リハビリの様子

診療の合間に診察室へ通してもらい挨拶をした。廣瀬先生はじめ皆さんが白揃いの白ポロシャツを着ていることに気づく。取材のために今日だけ皆揃って揃えたというが、皆さん人似合いだ。

2人の先生から声がかかる

廣瀬先生は鬼無里診療所長を退任後、病院勤務を経て、平成25年4月に上田市武石診療所長に就任。病院勤務の頃から月1～2回、寺島先生（前武石診療所長）の手伝いとして診療所で診療していたことがきっかけとなったと思うが、声をかけてくれた。これが先生の策略だったと少し冗談かかして言った。さらに、長年武石診療所長を務めていた故矢嶋先生からも声がかかったそうで、武石診療所にゆかりのある2人の先生からのアプローチがあったということだ。

現在、診療所は廣瀬先生のほか、看護師4名、理学療法士は非常勤1名、事務職員3名の構成となっている。リハビリは週2回の予約制で行われているそうだ。

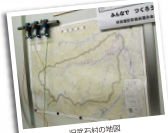
患者さんから さまざまな話を聞く

先生を含め診療所のスタッフの中で武石在住は1人だけ。地域の日米事や行事、バスの利用などの情報は、患者さんや住民の皆さんが教えてくれる。先生はそういう現状について、「こういうこともありかなと思いながら、「地域医療とは、まずその地域に暮らして」という人もいらっしゃって、それを聞くと少しつらいなと思うこともある」と語った。しかし、患者さんとのさまざまな会話は先生と患者さん、スタッフも交えたコミュニケーションの一つとなっているようだ。

そんな患者さんとのやり取りでは地域の名前がよく出てくる。地名は住所に載っていない場所や昔からの言い方があったり、細かく地区が分かれていたりする。先生は鬼無里診療所時代の経験から、「そこは気をつけよう」と思っていて、旧武石村の地図があると聞いた時はすぐにからったそうだ。現在も診察室に貼ってあり、それを見ながら患者さんと話したりする。

患者さんに声をかける（待合スペースにて）

先生は地図を見ながら、「会津里ということでは、花梨がとてもきれいで好きなところです。花梨がとてもきれいですよ」とおすすめの場所を教えてくれた。



旧武石村の地図

独居高齢者の問題

訪問診療は現在35件ほどとっている。武石地域は、高齢者の独り暮らしでしかも認知症の人が多いそうだ。他の地域だったら家族やケアマネジャーがついているだろうという人も独り暮らしをしているということ。「大丈夫なのか」と最初は思ったという。

武石に来るまでの訪問診療では、寝たきり患者さんは家族と同居している方が多く、会計や薬は家族が取りに来てくれた。ここでは薬を持っていかなければいけないとか、何かあったら届けなければいけないということがあるから、薬もきちんと服用していてあまり飲まず、ヘルパーさんにも確認してもらったりしている。「あれは独り暮らしの人が「それでも地域の中で暮らしている」ということに少し驚いたそうだ。

独り暮らしの人については、近所の人が見ていてくれたり、わさびが耳に入ってくれたりする。「こういう人がいるけれど知っている？」などと市の高齢者の担当へ知らせたり、逆に連絡があったりするそうだ。「市では独り暮らし世帯のリストアップなどされている。実際その人の暮らしぶりは、認知症があればそうなっての日常的に利用するようになるまでが難しいらしい。

訪問診療のスタッフはまく見ていて、駐車場に止める車に凹みがあったりすると、「すごく凹んだ車に乗っているけど大丈夫ですか？」などと声をかけているそうだ。

高齢者が、運転を止めた時は生活環境の変化による健康への影響が心配となる。「車からバスへのスムーズな移行ができるようなまちづくり・環境づくりが必要だと感じた。

患者さんの作品

待合室（農スペース）

基盤を生かしつつ新しい連携を

取材の途中で、看護師さんが先生に指示を仰ぎに来た。独り暮らしで認知症の患者さんについて、だいぶ前に処方した薬をたくさん持っていて最近処方した薬は不明であることと、便の状態などを報告。先生は薬の服用はルパーさんにお願いするなどを指示していた。

このような状態の患者さんについて先生は、「医療では大したことはできない。生活や食事をどうしようかといって、ほとんど介護の部分になる。その為のたりを介護にお願いしながら、困ったことや医療的な必要性を判断するとか、最期の決定をすることなどは医療がやるといろいろ感じて思いして、情報を提供してもらう」と介護との連携と医療の役割を具体的に示した。

ただ、武石診療所の在宅医療の歴史から考えると、もっと組織だった仕組みができているのかと思っていたが、きちんとしたシステムがないとし、「良し悪しだと思うが、今の時代それでは困る人が出てくるので、ルールに則ってできるような仕組みを再構築しなければ」と課題を挙げた。医療と介護の連携に関しては、まだこれからだが、基盤があるのでそれを上手に生かしていきたい」と意欲のぞかせた。

病診連携はお互いに願っている

武石地域の周辺には、国保依田窪病院と丸子中央病院がある。病院と診療所の連携は、疾患、家庭の状況、本人の意向等患者さんごとに対応している。

「鶴子はどうですか」と患者さんと談笑

武石地域の場合は、依田窪病院とはお互い国保直診施設ということもあって、もう少し連携したいという思いは先生ともちろん依田窪病院三澤院長にもあるようだ。これは病院及び診療所、患者さんにもメリットがあるということなので、先生も「話が進めばいいなあ」と期待している。

この診療所の存在意義

武石地域は医療資源地ではないそうだ。車で10分も行けば依田窪病院や丸子中央病院に行ける。車で行く人は30分間内なら問題ないので、そこへ行けるので、自分の裁量もいろいろへ行けること、そういうことからも武石診療所の患者さんは、ここにいかゝることができない人が多いということになる。

武石診療所とそこに来る患者さんのことを考えたことと、「在宅医療を本当にしていかないと、この診療所の存在意義がなくなってしまう」という先生の言葉から、この地域での在宅医療の重要性を再認識した。

患者さんの作品は先生も楽しみ

これからの武石診療所

廣瀬先生は、かつて武石診療所で行われていた武石村が重荷過ぎるから、さまざまなことを思案している。

在宅に関しては、もっと低がん軽症の患者さんは、ここにいかゝることができない。

机にはパソコンがない

診療所の診療システムはパソコンをほとんど使用しない。接続に時間がかかる、診療にはは使えないからだそうだ。問題は、「それだけではなくパソコンが解消できれば、在宅や病診連携、ＩＣＴを活用した地域包括ケアシステムなどにも結びつけられるのではと考えている。

診療所での診療に関しては、先生、スタッフを含めもっとリハビリの視点を持って患者さんの生活指導ができるようになりたいと思っていて、「整形内科」に注目して重強しているとのこと。整形内科とは、手術はしないで関節や筋肉を治療をしていこうとして、患者さんの訴える痛みに対応してこうするか、痛みでできないことをどうすればできるようになるかというアプローチができるのだという。

「患者さんには何でも相談してもらって、一緒に考えていきたい」という思いが伝わってきた。

スタッフとお揃いのポロシャツで